

グラン＝ギニョル ベル・エポックの恐怖演劇

アニェス・ピエロン

真野倫平訳

はじめに断わっておくと、「グラン＝ギニョル」Grand-Guignol は「ギニョル」Guignol とは異なる。ギニョルは1808年頃にロラン・ムルゲによってリヨンで誕生した操り人形であり、グラン＝ギニョルは1897年4月13日にパリのシャプタル通りに設立された劇場の名前である（図1）。とはいえ、両者の間に関連がないわけではない。その関連とは、検閲である。

人形劇のギニョルは、リヨンの絹織物工の代表として当局の検閲を受けた。というのもギニョルは、中国やタイから輸入される外国製の絹との競争によって失業したリヨンの絹織物工たちの反抗を代弁していたからである。

一方、グラン＝ギニョル座の創立者にして初代支配人（1897-99）であるオスカル・メテニエも検閲を受けた。なぜなら彼は自らの作品で、社会から排除された者たち、すなわちならず者、徒囚、死刑囚などを初めて演劇の舞台に乗せたからである。そしてメテニエは彼らに彼ら自身の言葉、すなわち隠語を話させた。これは当時としては画期的なことであった。演劇はサロン劇やヴォードヴィルでおなじみの、夫＝妻＝愛人という三角関係を離れたのである。メテニエは購入したばかりの劇場を名づけるにあたり、次のように考えた。自分はギニョルのように検閲を受けた。しかし自分はギニョルより何歳か—— ほぼ1世紀—— 年長である。したがって自分は成長したギニョル、グラン＝ギニョルである、と。

創立当初、グラン＝ギニョル座は恐怖演劇専門の劇場ではなかった。そこでは詩の夕べが開催され、そしてもちろん、メテニエ自身の戯曲が上演された。それらはしばしば隠語のタイトルを持っていた。『密告者』*La Casserole*、『不義の子』*Le Loupilot*、『公娼証明書』*La Brême* などである。

メテニエは数年にわたりいくつかの警察署で働いた経験を持ち、物事をうまく片付けるすべを心得ていた。警察が上演を中止し劇場を閉鎖しても、観客たちは深夜過ぎに戻ってくれば上演が行われるということを知っていた。グラン＝ギニョル座は当初から成功を収め、演劇が盛んなこの都市において特権的な地位につくことができた。

しかし、その翌年にメテニエは病に倒れ、劇場を第二代支配人（1899-1914）のマクス・モレーに譲らざるをえなかった。グラン＝ギニョル座を恐怖演劇専門の劇場にしたのはこのモレーである。

かつては「専門劇場」théâtre de spécialité と呼ばれる、さまざまなマイナージャンルに対応した劇場が存在した。それらは、第二次大戦後にジャン・ヴィラルール¹が提唱した「万人のための演劇」théâtre public とともに終わりを迎えることになる。恐怖演劇の専門劇場であるグラン＝ギニョル座の隣には、悪魔が主人公を務める「地獄」L'Enfer という劇場があった。また、「虚無のキャバレー」Cabaret du Néant では、骨の形をしたろうそくの明かりの中、人々は頭蓋骨の杯で酒を飲んだ。

モレーはさまざまな方法でグラン＝ギニョル座を恐怖演劇の専門劇場にした。例えば彼はロルドの『グドロン博士とプリュム教授の療法』（1903）の上演の際に、アドリアン・バレール²の巨大なポスターを町中に貼り出して人々に衝撃を与えた（図2）。また彼は劇場内にバーを置いて、観客が幕間に酒を飲んで感情を鎮めることができるようにした。それはペルーのコカをベースにしたマリアニ酒のような一種の強壮剤であった。俳優たち自身も強壮剤「カントニーヌ」の広告にこのようなコピーとともに登場した。「カントニーヌで血色良好！」

というのも、恐怖演劇は俳優にとっても観客にとっても神経をすり減らすものであったからである。失神する者さえ少なくなかった。それどころかそれこそが上演の成功のバロメーターであった。失神者が5人、7人、11人、15人……。すると支配人のモレーは舞台裏で揉み手をして喜ぶのであった。

モレーは1904年に、次のような台詞のアベル・フェーヴル³の漫画をプログラムに掲載した（図3）。「担当医師はいないのかい？——いえ、彼もみなと同じく気絶したんです」。劇場は上演に際して担当医師を置くことを義務づけられていた。モレーはこの担当医師を宣伝に役立てるすべを知っていた。彼はこの本来目立たない存在を、血まみれの劇場になくしてはならない一登場人物に仕立て上げたのである。

モレーは医師の診察カバンをわざわざ「気付薬箱」la boîte à sels に置かせた。これは招待客が切符を受け取る専用の窓口の呼び名であり、特にグラン＝ギニョル座にはぴったりの名称であった。この名称はメロドラマ⁴の時代以来、過敏な観客を元気づけるために気付薬が用いられたことに由来する。

1 フランスの演出家（1912-71）。アヴィニョン演劇祭の創設者、テアトル・ナショナル・ポピュレール支配人。

2 アドリアン・バレール（1873-1931）はフランスのイラストレーター。

3 アベル・フェーヴル（1853-1945）はフランスの風刺画家。

4 19世紀前半に流行した音楽付きのドラマで、強烈な劇的効果の特徴とする。

つぎに、モレーはプログラムにおいてコメディーとドラマを組み合わせ、「スコットランド式シャワー」のように笑いと恐怖を交互に提供した（図4）。一晚の演目は例えば次のように構成される。

- 1) 前座劇：遅刻者を席に着かせるための軽い演目。
- 2) コメディー：例えばボジョ『アデルはおめでた』、ロルド、モンティニャック『エルネスティヌはおかんむり』、ベルナール『二人旅』など。
- 3) 大ドラマ：ロルド、フォレー『精神病院の音楽会』あるいはロルド『サルペトリエール病院の講義』。
- 4) コメディー：例えばクルトリーヌ『ブラングラン家の人々』。
- 5) 第二のドラマ：ヌヴェー、モレー『激烈な欲望』あるいはシェーヌ『地獄に堕ちた者』。
- 6) 再びコメディー：観客が神経を鎮めてピガール界限のレストランに夜食に行けるようにするための演目。

さらに、モレーは自分の劇場に特別席を設けた。五つある「格子付ボックス席」である（図5）。それは二人用ボックス席で、一種の木製のブラインドで閉ざされており、観客は姿を見られることなしに舞台を観ることができるようになっていた。当初、この種のボックス席は王や皇帝の秘密を守るためのものであった。だからそれは「王のボックス席」あるいは「皇帝のボックス席」と呼ばれていた。外部からの視線は遮断されていたので、君主の態度や反応が観客に影響を与えることはなく、観客は自由に芝居を評価することができた。君主は人知れず席を立つことさえもできた。しかし、グラン＝ギニョル座における格子付ボックス席の用法は特殊なものであった。この席のおかげで、暴力的なシーンを見て興奮したカップルは——グラン＝ギニョル座は通称「責苦の劇場」と呼ばれていた——ひそかに性行為にふけることができたのである。

客席には二つの異なる入口から入ることができた。大きな入口は土間席の観客のためのものであり、小さな入口は格子付ボックス席の予約客がなるべく秘かに入場するためのものであった。しばしば若者たちは——大抵の場合医学生たちであった——グラン＝ギニョル座に恋人を連れてきた。彼女は恐怖のあまり若者に身を寄せ、その腕に抱きしめられる。これがグラン＝ギニョル風ナンパ術である！

グラン＝ギニョル劇の大半が閉鎖空間を舞台にしていることは注目に値する。精神病院（ロルド『グドロン博士とプリュム教授の療法』、ロルド、ビネ『精神病院の犯罪』）、灯台（オティエ、クロクマン『灯台守』）、手術室（アラニー、ネルソン『血の接吻』）、転轍室（ロルド、フォレー『赤い夜』）、サーカス小屋（モレー、エラン、デ

ストク『怪物を作る男』、船（ロルド、シェーヌ『死の船』、ボワシェ『恐怖の貨物船』）、ダンスホール（ズイラン・ド・ニーヴェルト『仮面舞踏会は中断される』）などである。

ジャン・アラニー、シャルル・メレ、ピエール・シェーヌ、アンリ・ボーシュなどの作家は別にして、最も有名で多作な作家は「恐怖のプリンス」と呼ばれたアンドレ・ド・ロルド（1869-1942）である。この奇妙な人物は、仕事においても私生活においても二重の生活を送った。仕事においては、図書館の司書であると同時に恐怖演劇の作家であった。私生活においては、いわば二つの家庭を持っていた。彼の作品は長編小説、短編小説、戯曲に至るまで膨大な数に上る。とはいえ彼は幾人かの「代作者」*nègres* を持っており、これは当時としては当たり前のことだった。

グラン＝ギニョル座の代表的女優はポーラ・マクサだった（図6）。彼女は「あらゆる受難のラシェル⁵」あるいは「シャプタル小路のサラ・ベルナル」と呼ばれ、自ら「世界で一番殺された女」と称した。彼女の叫び声は演劇史上最も美しい絶叫であり、愛好家たちを魅了した。彼女はまた、暴力的なシーンを演じながら脚や肩や胸を美しく見せるすべを心得ていた。そしてまた、人工の血のりの小瓶を巧みに使うすべを知っていた。時には、演出家がラ・ヴィレットの屠殺場に取りにやらせた本物の牛や豚の血が用いられた。さもなければ赤スグリのゼリーが役に立った。ひとたび舞台を下りると彼女は若々しく快活な女性だった。新聞記者たちは、彼女が美しい歯並びでスグリジャムのパンを食べるのを見て、魅了されずにはいらなかった……。話は逸れるが、私は2011年の春にラントルタン社からマクサの伝記を出版する予定である。タイトルは『マクサ、世界で一番殺された女』である。

この劇場の花形女優（ディーヴァ）は第三代支配人（1915-27）であるカミーユ・ショワジーによってスターとなった。彼は舞台装置と特殊効果の才能を持ち、舞台にこのジャンルの重要な諸テーマをもたらした。すなわち、あらゆる進歩への恐怖、とりわけ列車や自動車や電話に対する恐怖（サルテーヌ『急行十三号』、ロルド、フォレー『電話口で』）。あるいは、われわれの間にいるかもしれない狂人への恐怖（ロルド、ビネ『謎の男』、ロルド、ビネ、モレー『強迫観念』）。貪欲でしばしば無能な外科医への恐怖（ムエジ＝エオン、ジュバン『二分法』、ロルド『死の外科医』）。そしてギロチンへの恐怖（エロ、アブリク『未亡人』、エラン、デストク『彼方へ』）。冷笑家であった作家のコレットはグラン＝ギニョル座を「生首の劇場」と呼んでいた。

ショワジーはまた音響効果の達人でもあった。彼は暴風雨や雷鳴の雰囲気を作り出すすべを知っていた。照明においても巧妙で、いくつかのマッチ箱で脱線した列車を

5 ラシェル（1821-58）は19世紀の伝説的な悲劇女優。

作り出すことができた。船が波の上を滑ってゆく錯覚を与えることもできた。

両大戦間の時期はグラン＝ギニョル座にとって偉大な時代であった。劇団はフランス国内で、そして世界中で巡業公演を行った。特にロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコとの関係は緊密だった。しかしこれらの巡業において、公演の印象はパリほど強烈ではなかった。劇場全体の雰囲気は欠けていたからである。すなわち、劇場に通じる薄暗い袋小路。天井から二つの大きな天使像がぶら下がる独特の客席。最前列に並んだ座席。ゴシック風の内壁。殉教者を描いた天井の四枚の絵。そして有名な格子付ボックス席……。

カミーユ・ショワジーが1928年にジャック・ジュヴァンに支配人の座を譲ると、グラン＝ギニョル座は下り坂をたどり始める。ジュヴァンはあらゆる面で権力を振るおうとした。彼はソニア・ラメル、エドゥアール・ジルベールといったさまざまな匿名を使って上演される劇の大部分を書いた。彼は、たった一人で観客を引きつけていたマクサを次第に冷遇するようになった。ジュヴァンの行動はまずかった。彼は権力を独占したのみならず、「細切れの演目」のシステムを放棄し、さらにグラン＝ギニョル座を「インテリ化」しようとしたのである。この劇場の力の源泉は、自然主義の伝統の中で一級の品質を保ってきたことにあったというのに。

それに続く支配人たち、悪質な経営、そして第二次大戦が劇場の閉鎖を早めた。1963年1月、大規模な競売が行われた。舞台装置、戯曲、ポスター、小道具（生首、仕掛け刃物）が売りに出された。ポスターの大部分は最後の総支配人とともにニューヨークに渡った。彼はポスターをある収集家に売却し、私は10年ほど前にニューヨークでその人物に会う機会があった。こうしてひとつの文化遺産が失われた。私は何とかしてそれを復元しようと粘り強い努力を重ねたのである。

グラン＝ギニョル座で生き残っているもの、それは語彙である。セリーヌはこう言った。「マクベス、これこそグラン＝ギニョルだ」。そして血まみれでグロテスクな場面は「グラン＝ギニョレスク」と形容される。この表現は、アンドレ・ド・ロルドの重要な共作者であった心理学者のアルフレッド・ビネ（1857-1911）によるものである。

そしてまた、グラン＝ギニョル劇のレパートリーも生き残った。それは私が1995年にロベール・ラフォン社の「ブカン」叢書から主要作品を収録したアンソロジー『グラン＝ギニョル ベル・エポックの恐怖演劇』を出版したからである。この本に含まれる戯曲はいまや世界中でしばしば上演されている。私はグラン＝ギニョル劇が真野倫平氏編訳の『グラン＝ギニョル傑作選』（水声社、2010年）によって日本にまで到達したことを嬉しく思う。そしてこのジャンルが日本で新たな花を咲かせることを期待している。

今日ではグラン＝ギニョル座の建物は完全に改装されてしまった。そこにはもはや血も、恐怖も、叫び声もない。現在そこにはIVT（インターナショナル・ビジュア

ル・シアター) という劇団が入っており、その主要な目的は手話の習得である。思えば奇妙なめぐり合わせである。かつて叫び声で満ちていた場所が、今では聾啞者たちの手に渡ったのであるから！

訳者付記

本稿は2010年11月12日に南山大学で行われたヨーロッパ研究センター主催講演会「グラン＝ギニョル ベル・エポックの恐怖演劇」にもとづく。アニェス・ピエロン氏は大学に属さない在野の研究者であり、演劇および言語学の分野で多数の著書がある。1995年にはロベール・ラフォン社からアンソロジー『グラン＝ギニョル ベル・エポックの恐怖演劇』を刊行し、長らく忘却の淵に沈んでいたこのジャンルを復活させた。主要著書は以下のとおりである。

Le Grand Guignol. Le théâtre des peurs de la Belle Époque, édition établie par Agnès Pierron, Robert Laffont, « Bouquins », 1995.

Agnès Pierron, *Les Nuits blanches du Grand-Guignol*, Seuil, 2002.

Agnès Pierron, *Dictionnaire de la langue du Théâtre*, Le Robert, 2002.

Agnès Pierron, *Dictionnaire des mots du sexe*, Balland, 2010.



1. グラン＝ギニョル座



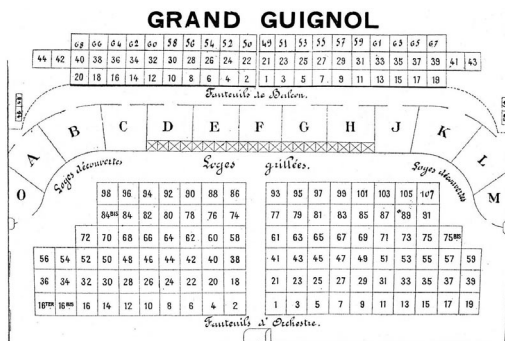
2. 『グドロン博士……』のポスター



3. アベル・フェーヴルの漫画



4. 1924 年のプログラム



5. 座席表 (D~H が格子付ボックス席)



6. マクサ

